オーケストラ二都物語：ロンドンと東京～ふたつのフィルハーモニー

防衛大学校　国際関係学科教授
等松 春夫

東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第9回は、国際関係学を専門にされ、英国音楽についてもさまざまな執筆活動をされている等松春夫氏。少年時代からオペラ、交響楽の双方で東京フィルの演奏に親しんできてくださったそうです。

縁あって1990年代、20代後半から30代前半にかけて7年間英国で学んだ。その間、安価な学生券を買える特権を駆使して600以上の演奏会、オペラ、バレエ、演劇に足を運んだ。中でもテムズ河畔のロイヤル・フェスティヴァル・ホール（RFH）でしばしば聴いたのがロンドン・フィルハーモニック管弦楽団（LPO）である。1932年に英国楽壇の重鎮サー・トマス・ビーチャムによって設立され、たちまち英京の音楽的な顔となった。1936年には早くもドイツ公演まで行っている。第二次世界大戦後の苦難の時代を巨匠サー・エイドリアン・ボールトと共に乗りきり、その後ハイティンク、ショルティ、テンシュテット、ヴェルザー＝メストらの名指揮者たちに鍛えられた。LPOがロンドンの他の同僚楽団たちと異なるのはオペラにも強い点である。6月から8月はサセックス州の鄙びた町ルイスに移動し、この地で開かれるグラインドボーン・オペラのピットに入る。

このオペラ祭は1934年、富豪ジョン・クリスティによって始められた。本業はパブリック・スクールの教師という物堅い人物であるが、熱烈なオペラ・ファンであった。ソプラノ歌手オードリー・ミルドメイと結婚してオペラ熱に拍車がかかり、ついには広大な自邸の庭に歌劇場を建ててしまった。所詮金持ちの道楽ですぐにつぶれるであろうとの大方の予想に反し、紆余曲折を経て現在は英国の音楽生活に不可欠のアセットになっている。1960年代以来この歌劇場の音楽面を担ってきたのがLPOである。

グラインドボーン音楽祭（2019年7月）クリスティ邸とオペラハウスの前で

東京フィル ロンドン公演（1994年10月）のCDジャケット

1993年の夏は建て替えのためオペラ祭が開けず、その代わりRFHで3演目9回の演奏会形式上演を行った。『フィデリオ』『ベアトリスとベネディクト』『メリー・ウィドー』である。英国の貴顕と紳士淑女が集うグラインドボーン・オペラは東洋から来た一書生には敷居が高かったが、なじみあるRFHには自然に足が向いた。3公演とも堪能したことはいうまでもない。

考えてみれば同様の形式でオペラを広範囲の聴衆に提供していたのが東京フィルの「オペラ・コンチェルタンテ」であった。あのシリーズでオペラの愉しみに目覚めた人は相当な数になったであろう。東京文化会館や新国立劇場のピットに入ることの多い東京フィルだからこそできた企画であった。1979年夏、少年時代の筆者が初めて舞台を観てオペラの素晴らしさに目覚めたのは、若杉弘氏が指揮する東京フィルが東京文化会館のピットに入った二期会『ローエングリン』の公演であった。英国留学時代の1994年秋にはロンドン公演で大野和士氏率いる東京フィルの雄姿に接することができた。オペラと管弦楽、双方に通じた東京フィルは日本では稀有な存在なのである。

等松春夫（とうまつ・はるお）
1962年米国パサデナ市生。防衛大学校国際関係学科教授。専攻は政治外交史・比較戦争史。オックスフォード大学博士（政治学・国際関係論）。主な著訳書に『日本帝国と委任統治』『なぜ国々は戦争をするのか』*A Gathering Darkness: The Coming of the War to Asia and the Pacific* など。1991～97年の留学中に英国音楽の魅力に目覚める。エルガー《エニグマ変奏曲》、《南国にて》、ホルスト《惑星》等のスコア解説を執筆。英国エルガー協会とホルスト協会の会員。